

飛火

東京都

『飛火』の半世紀

飛火、と書いて「とぶひ」と読む。うっかり「とびひ」と読んでしまいうのだが、それでは怖い皮膚病のトビヒを思いだしていけない。あるいは、「街の暴動がクーデターにまで飛び火した」なんぞとなれば、いかにも物騒だ。私たち同人は、そういう危険な、凶々しいものとは縁がない。どこから見てもみな穏健派ぞろいである。いや、少なくとも外見においては、と一言付け加えるべきか。なにせ文学をやるくらいなのだから、内側の本当のところはわからない。もしかしたら、同人めいめいが、名状しがたい熱いマグマを心の深層部に秘めているやもしれぬ。その深みからやがて、水到りて渠成るとやら、何ものかが流れ出て作品をなす——それを信じたいとも思う。

『飛火』の五〇号が出たのは今より六年前、二〇一六年の夏であった。これを記念すべき慶事として、同人内外の諸氏から寄せられたもろもろの文章が誌面を飾った。さかのぼること四〇年余りの創刊当時（一九七二年）を回顧した話などは、じつに興味が尽きない。会の発足時からずつ



と同人に残っている岡谷公二氏の一節を、ここに引用させていただきます。

「飛火とは、電話などの通信手段のなかった昔、緊急事態が発生した時、高所で火を焚いて、遠隔の地にそれを知らせる手段、すなわち、のろしのことだ。雑誌の雰囲気にな

争を思わせるものは何もなかったけれども、同人一人一人が、半世紀近くにわたり、見えない世界の人々に向かって、飛火をあげ続けてきたのはたしかだ。」

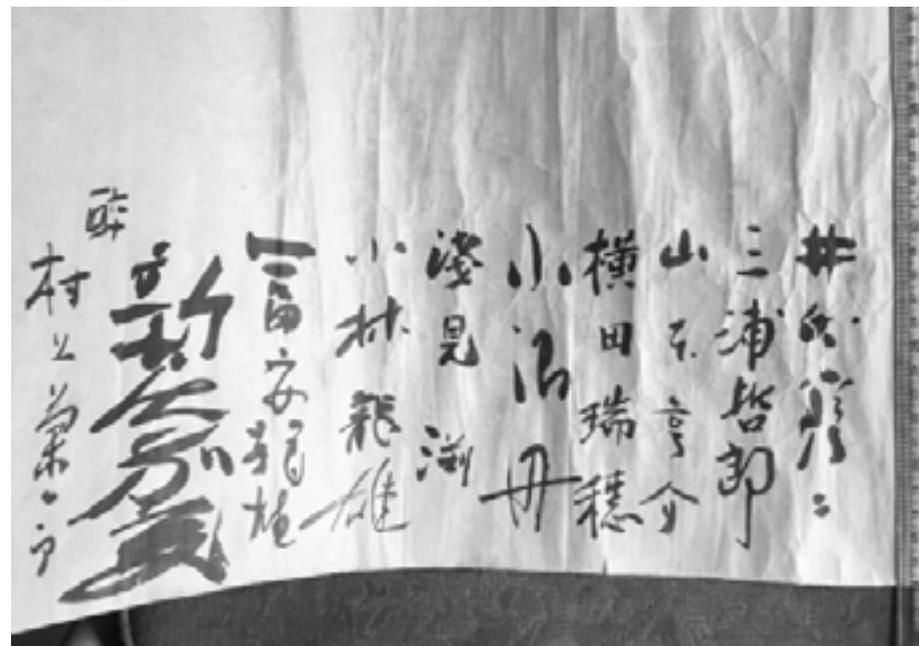
もう一人、当初からの同人に白田絃氏がいて、白田さんの述懐によれば、事の起りは大学の研究室に集う教員たちの雑談にあったそう。その折に、雑誌名の提案が竹内勉也氏から出て、なんとなくそれに決まったというのである。竹内さんは自由にも書くための雑誌づくりをめざしたわけだが、この「自由」を渴望するところに本誌の性格がおのずと顕われているようだ。大学の教員でも、やはり人間である。同人の全員が教員ではないまでも、全員が人間である。だから、一個の人間として書きたいことを書く。紀要論文などにはどうしたって書けない自由なスタイルでものを書きたい。こうして始まったのが『飛火』である。

私たち同人は合評会などやらない。思うに、文学は所詮、自分一人の仕事だろう。その成果も責任もすべて自分一人の側にくっ付いている、というものだろう。みんなが集まって、わいわいガヤガヤ騒いでどうなるものでもない。

しかし、それとは別に、同人どうしの交流というやつがある。折々の飲み会やら、ときには一泊の温泉旅行などもある。そういう場では、よもやま話に花が咲くわけ



一泊の温泉旅行（2002年・新潟）



載っている。各号の発行年はもとより雑誌のページ数と、作品題名、作者名とが一覧できる。これを見てみると、くさくさの想いが湧く。雑誌は六〇ページや七〇ページと、きもあれば、二〇〇ページ近くにも及んだときがあった。書き手のなかには、すでに遠い過去の人となり鬼籍に入っただ人もある。当の四一号にしても、「浅原義雄追悼号」と銘打ってあり、故人の生前の笑顔がありありと偲ばれる。浅原さんは温泉博士の誉れ高く、同人の旅行では各地の名泉に連れていってくれた。他にも数名の同人が亡くなった。雑誌も淋しいものになろうかと心配されたときもあったが、近年では新人の加入もあり、八名前後のメンバーが変らずに保持されている。今年に入ってから五〇代と六〇代の男女それぞれ一名が加わって、『飛火』の新しい一ページがまた開かれようとしている。

(代表・梅宮創造)

「飛火の会」連絡先

〒352・0014

埼玉県新座市栄五・七・一三

梅宮方

だが、目尻をつり上げた議論などはしない。飲み会は永らく大久保の「くろがね」に場所を定めていたが、いつぞや店が閉じてからは他の酒場に移った。くろがねが閉店したあと、飛火の会に記念の一品が贈られたが、これはちよつといいものである。くろがねでの一夜、錚々たる文学者のみなさんが酒卓を囲んで、ほどよく酔いがまわった頃、興の赴くままに一人ずつ自筆のサインをしたためようという話になったらしい。「おい、おかみさん、紙をくれ、手ごろな紙を」。硯と墨と筆は、かたわらの小卓の上に常備してある。長い和紙の巻ものが来た。上質の障子紙とも見える。この長い紙の端からそれぞれ順番に筆をおろす運びとなる。まずは筆頭に井伏鱒二老師から、となったようだ。師匠のとなりには三浦哲郎氏がすわっていたのだろう。三浦さんのサインが二番目につづく。そのあと二人おいて小沼丹氏の洒脱な筆づかいが見える。浅見渕あり小林龍雄あり、そうして殿が村上菊一郎※氏の名で終っている。村上さんは頭の所に「酔」の一字を添えているが、これはお愛嬌というものだろう。今ではすっかり黄ばんだ紙面に総勢十人の顔ぶれが並んでいる。何だかまぶしいようだ。くろがねは、開店の昔から井伏さんがずいぶん肩入れした店であった。

『飛火』五〇号の前には、これも一つの節目として四一号があり、その巻末に、創刊号から四〇号までの総目次が

※編集部注／故村上菊一郎は早大文学部仏文教授。ボードレール「悪の華」などの翻訳がある。